

春夏秋冬「冬」矢田部良吉

冬は 雪霜 いと 深く

冷ゆる 手足を 暖かく

なさん 為とて 炉火に

近く 団居を する 時に

風は 吹き 入る 戸の あわい

外の方 見れば 銀世界

作者 明治時代の日本の植物学者、詩人。理学博士。東京大学初代植物学教授となる。東京博物館長、東京盲啞学校長等を歴任。「新体詩抄」を著わし、新体詩を提唱した。

解説 冬を詠った詩。

語釈 ※雪霜||雪と霜。※いと深く||大変深い。

※炉火||囲炉裏の火。ろび。※団居||特に親しい者どうしが集まって楽しむこと。団欒。※あわい||物と物とのあいだ。隙間。

通釈 冬は雪も霜も深く積もり、冷たくなった手足を温めるために囲炉裏の近くに集まるが、冷たい風が戸の隙間から吹き込んだ。外を見ると銀世界であった。